

朝鮮後期の刊本地図帳に見える日本図

ケネス・ロビンソン

朝鮮半島で刊本・筆写された輿地図帳は、朝鮮後期に広く流行した。それぞれの内容には相違があるものの、一帳の内に世界地図、中国・朝鮮・日本・琉球の国図、朝鮮国内の各道の地図を含んでいる点が共通している。17 世紀中頃から何度も重版されており、その人気のほどが窺えるが、これによってもたらされる利益が重版をますます煽ったのだろう。おそらく個人で、あるいは家庭で、輿地図帳は地理的学問的知識を参照したり教育したりするために使われ、筆写されたものと思われる。¹⁾ これまで地図帳の研究では、様々な版をその内容によって区別し、それぞれの内容について述べ、地図帳の中の世界地図の起源について論じられてきた。²⁾ 本稿は、中国・日本・琉球の国図を含んでいる刊本地図帳の形式について、特に日本図を中心に取り上げるものである。

ここで取り上げる地図帳は、17 世紀中頃から少なくとも 3 版を重ねている。その中には 2 つの変化が見られる。第 1 の変化は朝鮮王朝によって命じられた政庁所在地の地名変更に従ったものである。これらの変更から、この地図帳の中の道図が描かれた時期を特定できるので、それ故に朝鮮の描写時期も特定できる。しかしそれは、その地図帳の印刷時期までを決定するものではない。道図に見られる地名変更は、1652 年、1767 年、1777 年に行われている。第 2 の変化は、地図のレイアウトや、朝鮮半島内の同じ地名を表す地図帳の補足的な言語テキストの異同に見られるもので、これらの地図帳が 2 つかそれ以上の種類の版木によって刊本されていることを示す。しかし各地図に描かれている範囲は変化していない。

地図というものは「社会的（そして政治的）行為の創造的な産物である」。³⁾ 地図はまた、空間を形作るものである。それは枠組みによって、また地形や海や河川、またその他の様々な特徴を表す図像を通じて、空間を形作っていく。一帳の地図帳とは、既に認識されている各地域を表す地図を、ひとつにまとめたものである。それぞれの地図を連続して組み合わせることによって、地図帳はある地理的な配置や意図に従って構造化される。さらに「一帳の地図帳を構成する様々な地図が選択され、描かれ、編集される、そのやりかたには、特定の論理が存在している」。⁴⁾

ジェームズ・R・アカーマンはヨーロッパとアメリカの歴史的地図や現在の地図を研究して、こう述べている。「すべての地図帳は、地図の様式化された空間の中に、地理的概念も

表現している…。』⁵⁾朝鮮の地図帳は、地理や交流に関する言説を通して、さらに地図製作上の慣習や選択の論理を通して、多種多様な空間を生み出し、個々の地図や一式、一巻の地図の中に展開しているのである。

本稿では4つの刊本地図帳をとりあげる。その内2つは1652年の地名変更以後に刊本されたもので(神戸167と神戸168〔図1〕、神戸163〔図3〕と神戸165〔図2〕)、ひとつは1767年以後に刊本された。そしてひとつは1777年の地名変更以後に刊本されたものである(神戸166)⁶⁾。2つ折りになっている日本図は、その形態から地形として、土地の上に書かれた言語テキストとして、また地形の外部に付された補足的な言語テキストとしてとらえ、認識されるのである。これらの3種類の日本図は、補足的な言語テキストとレイアウトを別にすればほとんど同一とみなされるので、本稿では最も補足的な言語テキストの多い、1652以後に刊本された地図を、描写と分析のための基本地図として用いることにする。特に本稿は日本図と、この地図によって表わされた領土を、より広範な構成された諸空間の中に位置づけるものである。

空間を地図化することと、地図化される空間

刊本されたり筆写された地図帳は、「天下図」と呼ばれる1枚の世界図によって始まるのが普通である。地図作成における混合の驚くべき見本ともいえるこの地図は、様々な要素の中の宗教的図像や、空想上の土地や知識として地理の混合物である。仏教や道教の図像、創造上の土地などは古代中国のテキストである『山海経』の風景に点在しているものである。そしてそのイメージの中には幾つかの世界と複数の中心から成る国々とがある。それらは、例えばインドに発する仏教を含んでいる。さらにこの世界図から、中国や朝鮮、また日本や琉球の地図が展開される。朝鮮の地図帳は本質的に世界地図帳であり、14世紀後半と15世紀初頭に形作られた政治的経済的な交流の世界を示しており、それは活き活きとしたものであった。「2重の機能」を遂行することによって、地図帳は「地図帳が達成することができるものを達成している。つまりそれは同時に特定な地域——自国の領域——に関する多くの情報や、より広い世界の探求のために空間的な文脈を提供している」⁷⁾。世界地図帳は「天下図」から始まり、その言説のひとつの上に展開する。このような世界図の範囲が狭められる場合、最も小さく詳細なイメージとなるのは朝鮮の各道であり、想定される使用者の故郷である。

地図帳は様々な方法で中国と朝鮮が中心となっている。明朝中国をひとつの中心とすることによって、朝鮮の儒学者のエリートたちは、中国を世界の地理的・文化的・外交的中心として象徴的に表現している。中国から見たこの地図帳の世界秩序は、国図を通して、地図帳を読み解くための系統だった論理を与えている。

地図帳は少なくとも2つの違った構造の中で朝鮮を強調しており、どちらの構造も組織化の論理を地図帳に与えている。朝鮮国図を複数の道図へと展開していくことは、朝鮮こそが

この地図帳の第 1 の目的であるという表明であり、それは朝鮮人の使用者を念頭に置いているからだろう。この組織化の論理は地方性を強調し、想定される使用者と地図帳全体や個々の地図の関係を強調している。しかしこの組織化の論理は、地域の地図の連続的な秩序を表すものではなかった。第 2 は、朝鮮をひとつの空間の中で日本や琉球に関係づけている骨組みである。その配置に関しては後述する。

アカーマンが述べているように、地図帳は「自らの領域を示し、そこからの視線によって世界を探求する」⁸⁾ものである。地図帳の地図や、地図化された国々の連続的な配置は、朝鮮で始まったものではないが、単一の地図や 2 枚以上の地図における空間化は、朝鮮で重要とされていた言説を表している。この地図帳を開く者は、その視野を自らの土地から次第により大きな地域へ、朝鮮全体へ、そして中国や日本や琉球との交流の世界へ、さらには「文明」によって定義された明朝中国を中心とする世界や、精神的・知的な生活に関わるさらにもっと広い世界へと広げていくのである。⁹⁾

地図製作上の習慣や朝鮮前期から残された地図は、地図帳とその図像に形態と秩序を与えた。朝鮮国図と道図は『新增東国輿地勝覧』をモデルにしている。これは 15 世紀後半に初めて完成し、1531 年に刊本された地誌である。¹⁰⁾「天下図」と中国図の元図が何であったのかはわからない。しかし日本と琉球の図像は『海東諸国紀』を受け継いでいる。これは日本・琉球とそれらの国々との関係についての政府の報告書で、1471 年末に朝鮮国王に献上されたものである。1652 年以降の地図帳に含まれている日本と琉球の地図の選択は、『海東諸国紀』の入手に由来するものと考えてほとんどまちがいない。そしてこの政府による報告書は、日本人との交際の上で、朝鮮王朝で実用性を保ち続けた。しかし「天下図」は中国、朝鮮、日本、琉球、および安南を配置しているのに対して、朝鮮後期のこの刊本地図帳は安南図を含んでいない。

1652 年以降の地図帳の日本図は、この国を新しい形で提出している。その図像は新たな国土の形状と行政空間と、『海東諸国紀』の地図や文章から主に集められた言語史料とが混ざっていた。別の言い方をすれば、この新しい地図は『海東諸国紀』に集められていたものとは異なって、「様々な文化的関係」に基づいていた。『海東諸国紀』に集められたものは、政府の報告書の地図が引用された地図に日本の構成に関する情報を与えている文化的な諸関係とは異なっていた。¹¹⁾ 17 世紀中期以降のこのような文化的関係の中には、差異化によって促された収入という動機があるように思われる。1652 年以後の地図帳の日本図において新たな形態を与えられ、そしてそれ以後の様々な地図帳において、多少の変化とともに再生産された国土や海や地域の輪郭は、「日本」を表す新しい図像^{アイコン}となった。

この日本図は（中国図や朝鮮国図、琉球図と同様に）すべての要素を一目で見渡せるパノプチック (panoptic) なものであった。それは、使用者が地形の全体を俯瞰することを可能にした。この特徴は、それ以後の地図帳のレイアウトや欄外の文章の多様性を通して、一貫して残った。先に述べたようにその地図は、15 世紀の中頃から言語テキストや図像の構成とい

う形で朝鮮に保存されていた情報や言説や重要事項をも含んでいた。これらの情報源は、日本の図像的な再現に地名や人名やその他のデータを与えており、また地図帳の地図の中に 15 世紀に広く行き渡っていた政治的、外交的、経済的関係を刻み込んだ。

言語テキストや言説は、地図に描かれた日本を現在時の地域的な空間の中に置くと同時に、歴史的な地域空間の中にも置いた。中国、日本、琉球という 3 つの国を含むこの地図化された地域と朝鮮王朝は、1392 年の建国以来、交流を続けてきた。ここに見られるような交流の地域とは「経済的かつ政治的な様々な手段の相補性によって結合され、通常の交流を通してその構成部分の中で結合された連続した地域を意味する」¹²⁾。この地図帳は、その初版以来 200 年以上に渡る外交、交易、人的移動、また他の様々な交流を通して結びつけられたひとつの地域を再現している。したがってこの地図帳は諸地域を創出しているのである。

II 「與地図」地図帳の内容

地図研究者たちは、刊本された與地図帳を、各版の時代を特定し分類する目的で研究してきた。中村寛は世界図を専門に研究し、13 の版が存在することを明らかにした。李燦はその後、地図帳をもとにした 4 類型があることをつきとめた。しかし海野一隆は地図帳の内容をより詳細に検討し、これらの版をそれまでとは異なる組み合わせに分類した。¹³⁾ 中村や海野によって行われた地図帳の版の分類や算定をより確かなものにするために、刊本された地図とその言語的かつ補足的な言語テキストは、すべての地図帳の地図の一枚一枚に渡って検討される必要がある。本稿における日本図への注目は、このような研究方向の一助となるだろう。

本論で研究される日本図を含む地図帳のための新しい版本は、おそらくは 5 種類以上が使用されていると考えられる。第 1 は政庁所在地の地名の変化である。この情報から、特定の地域の地図や地図帳は改訂以降のものと特定できる。ここから第 2 の点が導き出される。2 版めの地図では黄海道の江陰県と牛峯郡という地名が一緒になり、黄海道の何枚かの道図は、江陰県と牛峯郡から改訂された新しい地名を「金川」、あるいは「金泉」と表記している。第 3 点と第 4 点は、日本および琉球の地図におけるテキストや図像のレイアウトの相違である。第 5 の点は地図の欄外に書かれたテキストの内容の検討である。

1652 年以前の政庁所在地名の全体を表している刊本された地図帳が現在まだ発見されていないということから、海野はこの地図帳が 1652 年以後に現れたと結論づけている。¹⁴⁾ 1 組の版本がもはや使用に堪えなくなっていくのがいつかを決定するのが困難であるために、刊本の日付がない地図帳は、特定の行政期間の朝鮮王朝を示すものとして、刊本時期が特定されるかもしれない。その行政期間は政庁所在地の地名の変化によって確定され、その行政期間の終焉もまた、政庁所在地の名称変化が図像に表れている地図帳、それも同じ様式で次に刊本された地図帳によって確定される。この時代決定の手段は、1652 年以後の地図帳と 1767 年以後の地図帳が、その後の政庁所在地の名称変化以降も使用されていたという可能性を示

している。もし 1652 年以後の地図帳の地図と 1767 年以後の地図帳の地図が、その後の行政期間の間も刊本され続けていたとしたら、その地図帳は朝鮮とその地域の時代遅れの図像を示していることになる。けれどもこの時代決定の方法は中国・日本・琉球の地図には応用できない。時代を示すそれ以外の要素が、地図の図像内に見出されなければならないだろう。

繰り返しになるが、地図帳は「天下図」から始まる。その次に来るのは中国の地図、「中国図」であり、それは明朝中国をその各地域の名称とともに示している。朝鮮半島の地図に見られる地図制作上の慣習は、(遅くとも) 15 世紀初頭には中国を地図の、そして世界の地理的文化的な中心と位置づけている。15 世紀に朝鮮で作られた世界図である「混一疆理歴代国都之図」の跋文は、「世界はとても広い。われわれは、中心にある中国から、世界の果てをなす四つの海までの間に、何千万里あるかを知ることはない」という言葉で始まっている。¹⁵⁾ 朝鮮における明朝中国の地図の作成は、もはや存在していない 1402 年の朝鮮の世界図においてなされたものでないとしても、朝鮮王朝が中国の地図を所有していたことが知られている 1482 年までには行われていた。¹⁶⁾

地図帳の中国図は、簡潔な中国政治史の記述も含んでおり、また当時に至るまでの諸王朝とその首都を示している。しかし 1777 年以後の地図帳の段階では、清朝中国を示す新しい地図が明朝中国の地図と差し替えられることはなかった。明朝中国の地図帳での出現とその継承については、幾つかの説明が可能であると思われる。第 1 の説明は行政の変化に基づいたものである。満洲族は 1644 年に明朝政府を北京から追い出し、1662 年から 1666 年にかけて 4 つの新たな地域(安徽、河北、河南、甘肅)が省に加わった。朝鮮で 1652 年以後に刊本された最初の地図帳の中国図は、朝鮮王朝が中国におけるこれらの地域の併合を知る以前に版木に彫られ、刊本されたと思われる。1652 年以降の地図帳の中国図の変化は、その後刊本された中国図にはうかがえるのかもしれない。しかしそれらに見られる変化の中に、行政上の地理の改定は含まれていない。1666 年以後の清朝政府の行政改革を示す新しい版木の不在には、おそらく重複した第 2 の原因が考えられる。満洲族の朝鮮攻撃は、朝鮮国王の満洲族への外交的な迎合を求めており、明朝中国の征服は、明朝中国と儒教文化へのエリート達の文化的な忠誠心と、「野蛮人」に対する軽蔑心をもたらしした。明朝中国に対する冊封関係に比べると、1645 年の清朝初代皇帝に対する朝貢の儀式の遂行は、「何か全く異なるものを意味していた——“野蛮人”が中国を支配しているという信じ難い現実や、その最中心部での文明の崩壊と世界秩序の混乱であった」。¹⁷⁾ このような視点から見ると、地図帳の中国図は特定の立場からの政治的な陳述を記載しており、儒教と儒教文化の共通の絆を保つような記述がなされていた。より深読みをすれば、1652 年以後の地図帳の明朝中国の図像は、明朝中国の文明の表現を翻訳し保存する為のメディアであったのかもしれない。¹⁸⁾ 「中国図」と、後に刊本された幾つもの地図帳の中で起きている同図の反復は、満洲族の政府の政治的正統性の否定であった。地図上に満洲族の統治を書き込まないという方法で、地図が持つ象徴的な力によって、現実の中国の国土にも満洲族の統治を入り込ませないようにして、

否定していたのである。版木を彫り地図を刊本することの背後の文脈がどのようなものであれ、朝鮮人たちが、これらの視覚的に保存された 17、18、19 世紀の明朝中国をどのように解読していたかについては、これからの研究によって明らかにされていくであろう。

朝鮮国図においては、世界図からこれらの 4 つの国々、すなわち中国・朝鮮・日本・琉球の地図が拡大し続けた。そのために国図は各地の行政的な地図へと分割された。それぞれの地図の最も詳細な行政的な表現は、県のレベルにまで達していた。各地図帳の中での地域の順番は異なっているが、典型的に、君主のいる首都である漢城が存在する京畿道の地図から始まっていた。これは刊本された中でもっとも限定された版の道図である。

地図帳の琉球図に関しては、説明文は『海東諸国紀』の「琉球国之図」から採られている。琉球国王への使節を勤めた道安という日本人僧侶が、1453 年に朝鮮国王である端宗王に琉球図を差し出した。¹⁹⁾ その地図は現存しておらず、その内容も知られてはいないが、歴史学者たちはその地図が『海東諸国紀』にある琉球図と同一の地図だったと考えている。『地図帳』の琉球図は、琉球国について、地図以外ほとんど言語的なテキストデータを含んでおらず、その内の幾つかは縮約されたものである。また、「琉球国之図」には描かれているのに、鬼界島の記述は地図帳の琉球図にはない。

1652 年以後の複数の地図帳と 1777 年以後の地図帳の中の日本図と同様に、琉球図もまた異なる幾つかの版本によって刊本されている。テキストと図像には異同があり、この先で議論される日本図に関しても同様である。おそらく地図帳の中で、行政上の地名変更があった道の新しい地図に揃えるために、琉球図と日本図のための新しい版木が彫られたのだろう。市場への配慮がこのような図像の、つまり商品の改定を必要としたのだろう。

III 日本図

本稿の地図帳の日本図に関する議論は、神戸市立博物館所蔵の南波松太郎コレクションの刊本地図帳と、その他の博物館や大学所有の刊本地図帳、そして個人蔵のものに基づいている。本稿に添付された写真は神戸市立博物館の御好意によるものである。各地に保存されている刊本地図帳の調査によって、それらの日本図の内容とレイアウトは、南波松太郎コレクションのものと一致することがわかった。

これらに記されている事柄は、中国図や朝鮮国図と同様に、図像と言語テキストの混合である。しばしば指摘されているように、1652 年以後の最初の地図帳の中の日本図（そして琉球図）の作者は、それ以来『海東諸国紀』から採られた言語テキストデータを繰り返し複製した。しかしより詳細に見れば、その言語データは少なくとも 2 つの地図とひとつの文献から採られている。『海東諸国紀』の地図は文書を補足し、これらの地図の多くの情報は、そのテキストを参照することなしにはその全体的な構成を見て取ることはできなかった。本章ではレイアウト、史料、言語テキスト（図像内テキストと補足的な言語テキストの双方を含む）について、言語データと図像データにおける言説について、そして地図の枠組みの中

の時間の相について議論するものである。

以下の議論が依拠する地図は、補足的なテキストとして、申叔舟の『海東諸国紀』の序文の抜粋を掲載している日本図である。²⁰⁾ この地図は 1652 年以後の地図帳に現れている。この地図を基本資料にすることを正当化する理由は、そのいずれもが十分とはいえないまでも、少なくとも 3 つある。第 1 の理由は、1652 年以後の地図帳は、「天下図」と中国図・日本図・琉球図を含む「與地図」地図帳の、現存する最も初期のものであること。第 2 にその序文からの引用が『海東諸国紀』に対する信頼を強調しており、そして推測するに、引用はその編纂者の名声と、あるいは朝鮮と日本の関係の報告の重要性をセールスポイントとしてかき立てるために展開されたと思われること。第 3 に、個々の地図にある言語テキストからのみ判断すると、この地図は 1652 年以後に刊本地図帳の日本図のモデルとなったと推測されること。2 番目に刊本地図帳の日本図はこの引用文を含んではいないが、国土に関する（と同時に国の上に書かれた）文章テキストは同一のものである。もちろん、これらふたつの 1652 年以後の地図帳の制作年代は、逆転するかもしれない。けれども 1777 年以後に刊本された地図帳の日本図もまた、この引用文を含んではいない。

この日本図のレイアウトと内容を紹介する前に、1652 年以後の地図帳の文書テキストを恣意的なカテゴリーに分類し、その言語的な項目の一覧表を作成することは、有益なことだろう。このカテゴリーは、15 世紀中頃と 17 世紀中頃に地図化された日本の行政的、経済的、そしてそれ以外の様々な特徴を反映している。

首都：「国都」・「江戸」

道名：「西海道」「八州」・「山陽道」・「畿内」「五州」・「山陰道」「八州」・「南海道」「六州」・「北陸道」「七州」・「東山道」「八州」・「東海道」「十五州」

州名：「筑前州」・「薩摩島」・「満後州」・「不見州」・「土佐州」「三州」・「周防州」・「淡路州」・「志摩州」・「近江」・「紀伊州」・「伊勢州」・「信濃州」・「甲斐州」・「陸奥州」・「出羽州」・「隠岐州」・「備後州」・「隠岐州」・「対馬島」・「一岐島」

島名：「箕島」・「雁道島」・「尾道関」・「竈戸関」・「硫黄島」・「恵羅武島」・「夷島」

市名：「風本浦」・「毛都伊浦」・「間関」・「兵庫浦」

人名：「小二殿」・「大内殿」・「天皇殿」・「国王殿」・「畠山殿」・「武衛殿」・「京極殿」・「山名殿」・「細川殿」

官名：「鎌倉殿」・「関白」

山：「先神山」・「芳田山」

水：「湖周三十八里」

産業：「産道刃鐵」・「産銅」・「産水銀」・「産硫黄」「大火井」「温泉」・「産金」・「産金銀」

記述：「国中多水不能尽記」・「山高四十里四時長青」・「有徐市廟」・「関白所居」

まずはじめに刊本されたもののテキストの配置に関しては、図像に添えられている枠外の 1 行の文章が、レイアウトの変更の、またしたがって版木の複数性の、最も重要な手がかりである。それは「国内多水不能尽記」という文章である。このコメントは地図製作者が日本図を描く時に『海東諸国紀』の日本の画像を参照したことの証しであり、またこれらの地図が単純化されていることを承認しているものでもある。

最初のコメントを説明するための、「與地図」の地図における湖水に関する他の唯一の言語的な言及は、「湖」、あるいはこの件に関しては「琵琶湖」を表す漢字である。言語テキストは、この湖はその周囲が 38 里あると述べている。「海東諸国総図」と「日本本国之図」という『海東諸国紀』の中の 2 つの日本図は、琵琶湖に加えてもうひとつの湖と幾つかの川を同定している。「日本本国之図」では、これらは伯耆州の「湖」と石見州と出雲州の境の「大河」である。『海東諸国紀』の九州図である「日本西海道九州之図」では、これらは筑前州の「芦屋大河」と豊前州の「里良河」である。²¹⁾したがって、このコメントは本文と図像に依拠したものではあるが、本文と図像は『海東諸国紀』の地図から版木に写されたものではない。

文章をレイアウトのひとつの要素として調べると、日本の様々な地図はこの文章を枠内の様々な場所に掲載していて、また文章自体も様々に変えている。この 1652 年以後の地図帳では、コメントは 8 文字の 1 行の中に述べられていて、「日本図」（神戸 167、神戸 168）という表題を持つ長方形の装飾枠の左下に置かれている。（主にこの日本図によると、この地図帳は中村のカテゴリーⅧと海野のカテゴリー 1.1 に対応する）。他の 1652 年以後の地図帳の日本図では 8 つの漢字が 6 字と 2 字の 2 行に分かれている。このテキストは右手上方の角に印刷されている（神戸 163、神戸 165）。1777 年以後の地図帳の第 3 の日本図では、このコメントは 4 文字 2 行に分かれていて、右手下方の隅に印刷されている。²²⁾ その地図もまた「日本図」と題されている（神戸 166、海野のカテゴリー 5）。

先に示したように、申叔舟の序文からの引用が、この 1652 年以後の地図帳を、他の 1652 年以後の地図帳や 1777 年以後の地図帳と区別している。地図の画像から補足的な言語テキストを分離している境界線に縁取られて、この提要は読者の右側の 3 行の文章へと伸びている。最初の 2 行の文章はそれぞれが 40 字からなり、3 行目の文章は 30 字である。また境界線はこのテキストを図の表題から分離させてもいて、それは右上の角に離れて枠で囲まれている。（地図 1 を参照。）序文からの引用は次のようなものである。

「海東諸国記序云国於東海之中者非一而日本最久且大其地始於黑竜江之北亥于我濟州之南與琉球相接其勢甚長厥初處處保聚各自為国周平王四十八年其始粗狹野起兵誅討始置州郡大臣各占分治猶中国之封建不甚統属習性強悍精於劍槊慣於舟楫云々」

地図製作者は、日本、琉球、朝鮮の位置関係についての申叔舟の記述を抜粋した。その叙述による位置づけは、『海東諸国紀』の読者や地図帳の利用者が、朝鮮から見た日本と琉球の位置関係を理解するのに役立った。地図帳では、申叔舟の記述は3つの地図化された国々を統合して1列に並べていた。この配列は朝鮮を地理上の準拠枠として用いていた。このようにして日本図と琉球図は朝鮮国図に連結された。別の言い方をすれば、申叔舟の記述はこの地図帳で、『海東諸国紀』にはなかった地理学上の業績となっている。なぜならば『海東諸国紀』は朝鮮の国土全体の地図がなかったからである。しかし、申叔舟の序文からの引用を載せていない他の1652年以後の地図帳や1777年以降の地図帳では、利用者がこれらの国々を他の国々に対して、様々な方法で位置づける必要があった。

1777年以後の地図帳の日本図は、他の補足的な言語テキストを地図の利用者に提供している。地図製作者は地図の4辺それぞれに1列のこのテキストを配している。この文章は地図の表題枠の外の右上方に置かれている。(もっとも地図帳全体を通じて地図の表題枠の配置が一貫しているわけではない。)その言語テキストは、豊臣秀吉の朝鮮侵略に次いで、朝鮮国王と対馬藩主が相互訪問と貿易の新規定に合意した1607年、そして以来の朝鮮と日本の関係に焦点をあてている。

しかしレイアウトには一貫している面があり、それは図の枠内に日本を位置づけるやりかたである。地図製作者は列島の北岸を地図の「底辺」に向けた。このやり方では本州の最北端が地図の左下方の角に来て、対馬は右上方の角に来る。「底辺」と「頭」は、ここでは表意文字の縦の方向付けによって理解された。地図帳の地図では、多数の表意文字の単語あるいは文章の最初の文字が地図の「頭」に置かれた。別の言い方をすれば、縦に書かれたテキストは南から北へと読まれたのである。

地図製作者は、琉球も同様に北岸が地図の「底辺」に向くように配置した。これに対して『海東諸国紀』の地図は北岸を地図の「頭」に向けている。1652年以後の地図帳に至る日本図の製作者は、日本の方位に合うように変更し、それによって朝鮮以南の地理上の一貫性を保つために、『海東諸国紀』の琉球図の方位を意図的に変更したように思われる。2つの島国は、地図利用者がこれらの国々を朝鮮から南方へと見渡す様なやり方によって位置づけられているのである。したがって、この地図の中には見えない朝鮮が、これらの2枚の地図の方位を決定している。陸地と海の模倣的な再提示方法を通じて、陸上の空間と海域の空間の中にこれらの2枚の地図を位置づけているのである。切り離された対象として、また切り離されていない対象として、朝鮮、日本そして琉球のこれらの表象を視覚化し可視化することによって、この地図帳は地図に対する、また地図が模倣的に(再)提示している場所に関する、様々な視覚の行使を養成したのだった。

朝鮮国図、日本図、琉球図の3つの地図は、この地図帳の中で一連のものとして構成されていた。日本と琉球の視座は朝鮮に、また琉球の視座は日本に置かれていた。言葉を変えれば、朝鮮はこの海域の中心であった。この3枚の地図に一貫した、そして模倣的に陸地と海

に対する視覚を系統立てる空間の視覚化を通して、この地図帳に結びつけられている。日本と琉球の集合的な地図作成の再定式化の過程で、地図製作者はこの地域を見渡す為の新しいパースペクティブも作り出したのである。

1652 年以後の地図帳の日本図の出典

1652 年以後の地図帳の日本図は「絵画的伝統と言語的な伝統の混合」した絵に似ている。²³⁾ 絵画的、あるいは図像的、言語的テキストは、それぞれが相異なる道をたどってこの日本図に至った。上記の引用文にある「伝統」を「実践」と言い換えることによって、地形や河川や海、また他の様々なアイコンを選択し、形作り、そして付置するといった、地図作成法における図像に関する実践は発達してきた。地図作成法における言語テキストの選択は、様々なタイプの記録—— 地図を含む公的記録、文書・宗教的・地理的な記録、それ以外の地図作成者が入手した社会に流布していた文書や個人的な文書—— から発生している。これらの実践はそのいずれもが、地図作成上の実践に取り込まれた文化的な取り決めに表現している。様々な実践のこの混合は、それゆえにまた 1 枚の地図、あるいは一連の地図の図像的そして言語的テキストの間の「間テキスト性」の形成を促すものである。²⁴⁾

この地図帳の日本図の図像的出典は、最も近いところでは朝鮮における日本図の作成法に見出すことができるかもしれない。日本を、その南を「頭」に、北を「底辺」に置くという日本の位置づけを説明する、2 つのシナリオが考えられよう。第 1 のシナリオでは、その地図製作者は、『海東諸国紀』の地図以外の日本図を参照することなく、日本を刊本されたものとして配置したというものである。2 つめは、地図製作者は姜沆（1567 年－1618 年）の「倭国地図」の方向づけをモデルとしたというものであり、その「倭国地図」は、「南瞻部州大日本国正統図」と題された日本図に倣って姜沆が製作したと思われる。この場合の地図作成上の系統学は、日本で作成された日本図に遡るかもしれない。

1597 年に戦争捕虜として、日本で身柄を拘束された姜沆は、日本で暮らす間に日本図を見せられた。その地図には補足的な言語テキストとして「弘法大師」（空海）の名が添えられていたと、彼は述べている。²⁵⁾ 姜沆が調べた地図が「南瞻部州大日本国正統図」の一種であったことは、極めてありそうなことである。同じ表題を持ち 16 世紀中葉の作品と推定されている地図が唐招提寺に保管されている。さらに 1624 年の日付を持つ、刊本された「南瞻部州大日本国正統図」が東京大学総合図書館に保管されている。3 つの特徴からこの様式の地図をひとつの代表とすることができる。第 1 に、「弘法大師」という名が、双方の地図の日本の図像を取り囲んでいる補足的な言語テキストに書かれている。第 2 に姜沆もまた、各地域や村落、水田や畑、寺社、そして男性、女性の人口について記録に留めている。これらの数多くの数字の中で、寺院と男性人口の数字が姜沆の記述や補足的な言語テキストと一致しており、それ以外の数字も非常に似通っている。²⁶⁾ 第 3 に、この 2 種類の日本図と姜沆の日本図は、両方とも用明天皇の治世（585 年～ 587 年）に畿内七道が設置されたことを、

また文武天皇の治世（697 年～ 707 年）に国土が 66 州に分割されたことを記載している。²⁷⁾しかし唐招提寺所有の地図と東京大学総合図書館所蔵のものでは日本の方向づけに違いがある。唐招提寺のテキストでは漢字が図像の内側や周囲の言語テキストの中に縦に書かれているために、地図を見るには垂直方向に置く必要がある。このように置かれた場合、その地図では九州と本州の西側が「頭」になり、本州の東側と北側が「底辺」に来る。²⁸⁾しかし東京大学総合図書館所蔵の地図の縦に書かれた文書を読むためには、地図を水平方向に拡げなければならない。そうすると日本の図像は南が「頭」に来て北が「底辺」に、地図を見る者の「右」に西が、「左」に東が来る。対馬はこの地図の右下方に位置し、言語テキストに囲まれている。²⁹⁾

姜沆は東京大学総合図書館の「南瞻部州大日本国正統図」に刊本されているのと同じ向きで日本の地図を作り、漢字も南を上、北を下にする方向で書き込んだ。³⁰⁾姜沆は 1618 年に死んだが、彼が書いた当時の日本に関する地理的な著述は 1652 年までに流通していたと考えられる。その例として李睟光は、彼が 1624 年に完成した『芝峰類説』の日本の地理に関する部分で、姜沆の書いたものを引用している。³¹⁾1652 年以後の地図帳の日本図が描かれている方向は、姜沆の地図や東京大学総合図書館の「南瞻部州大日本国正統図」の日本図と一致している。これらから見て、1652 年以後の地図帳の日本図の向きは姜沆の地図に由来しており、また後者は「南瞻部州大日本国正統図」の地図系譜の地図に由来していると思われる。

たとえ地図の系譜に関するこの考えが正確さを欠くものであると見られても、その図像や図像の向きは、『海東諸国紀』の日本列島の図像やその向きとは断絶が見られる。新しい日本図は朝鮮人の地図作成上の慣習から来たものであり、それ以前の『海東諸国紀』の日本の図像や、竜谷大学や本光寺の所有する朝鮮で作成されたより古い世界図の図像とは異なっている。朝鮮の地図製作者たちはこれらの図像にある列島や地方を、日本人の行基式の地図製作における道や行政上の主要地域を複製することによって形作った。この考察が妥当であると見なせば、姜沆の地図が模倣されたと考えられる。というのもその図像は、「南瞻部州大日本国正統図」に見られる行基式の地図作成法とは隔たりがあるからである。そこでは列島の形態に違いがあり、行政単位である各地方の強調の仕方やそれらの描き方に欠落があり、また後で述べるように架空の場所が、ひとつを除いて、この地図作成の伝播の道筋から消えているのである。

朝鮮で作成された日本図における言語テキストの慣習を調査することは、その言語テキストデータをデータ収集の伝統の中に位置づけることである。この地図帳の日本図（と琉球図）は、その言語テキストデータの大部分を『海東諸国紀』から引用している。³²⁾（同じことが琉球図に関しても言える。）申叔舟は政府の記録に基づいて『海東諸国紀』を編纂した。その記録はおそらく礼曹の様々な部所に蓄積されていたものだろう。言葉を変えれば、これらの刊本された地図帳の日本図（そして琉球図）の言語テキストは、15、16 世紀の王朝の、

公開を目的としない公式資料に由来しているのである。

またこの地図帳の日本図は、『海東諸国紀』と比べてその情報量が少ないこと、またその地形の輪郭を「歪曲」していることを批判されている。³³⁾しかし『海東諸国紀』の地図と、『海東諸国紀』に書き込まれたテキストとを区別することは重要である。地図は言語テキストの内容を補完している。北東アジアの海域図である「海東諸国総図」、そして日本列島を表す4つの地図は、言語テキストを参照することにより最も明らかに読み取ることができる。とりわけこの地図帳をその言語テキストから切り離すことは、地図帳の使用者から本来的な参照事項を奪うことである。

原典となった様々の地図を見ると、この地図帳の製作者は、「海東諸国総図」の情報と「日本本国之図」の本州と四国の2枚の地図、そして「日本国西海道九州之図」の九州図を照合していることがわかる。中央や道、地方行政等に関する情報は、これらの地図に由来している。道名を円形の装飾枠の中に書き入れるのは、『海東諸国紀』の地図に用いられている四角形の装飾枠に由来している。また地図製作者は、『海東諸国紀』に記載されている地方の描写から、経済に関するデータをこの地図に転載している。

だが、この地図帳の日本図に現れている個人名を『海東諸国紀』だけに帰することは、地図編纂のプロセスを過度に単純化するものである。この地図帳の日本図は以下の氏族の名前を明らかにしている。それは小二氏、大内氏、畠山氏、武衛殿、京極氏、山名氏、細川氏、国王殿（将軍家の足利氏）、そして天皇殿という各氏族である。これらの氏族名は「日本本国之図」と「日本国西海道九州之図」、そして同様に『海東諸国紀』の言語テキストの中にも現れている。

しかし「日本国西海道九州之図」はまた、15、16世紀に朝鮮国王と朝貢貿易関係を持っていた他の9つの氏族の名前を提示している。これらの氏族は4氏族と5氏族の2つのグループに分類されている。最初のグループは、「節度使」である渋川氏、「千葉殿」、「大友殿」、そして「菊池殿」である。大友氏と菊池氏は地方豪族であり、守護であり、千葉氏は九州北東部の地方豪族である。「日本国西海道九州之図」はこれらの氏族名を装飾枠で囲み、その文字を大きく記している。「日本国西海道九州之図」のもうひとつのグループを成す5氏族は、『海東諸国紀』の成宗王への提出の少なくとも10年前に、朝鮮王と朝貢関係を結んでいた氏族である。これらの5氏族は、総て肥前地方に基盤を置いており、その内の4氏族は壱岐の領地の管理を任されていた。これらの氏族は「日本国西海道九州之図」では左から右に、「田平」、「志佐」、「呼子」、「鴨打」、「佐志」の順で書かれている。前述の4氏族と比較すると、九州図ではこれらの氏族名は、装飾枠無しで、より小さな文字で表されている。九州図に見られるこのような提示法の違いは、これらの氏族の政治的な地位の違いを反映しているのである。

けれどもこれら9氏族の中で、1652年以後の地図帳にその記載が及んでいるものは皆無である。このような氏族名の削除は、魚叔権の『攷事撮要』に見られる、日本との外交上の

接触に関するリストに光を当てる。魚叔権はこのテキストを 1554 年に完成したが、18 世紀までの間に幾度も編纂しなおされた。これら九州の 9 氏族は『攷事撮要』にはその名を見出すことはできない。地図の製作者は『攷事撮要』をも参照したらしい。(表 1 参照。)

この地図帳の日本図に記されている氏族は、「日本本国之図」や「日本国西海道九州之図」に現れている氏族名と一致していない。地図帳の日本図の氏族名をより詳細に調べると、それらに共通しているものはわずか 9 氏族にすぎない。これは、この地図帳の日本図と「日本本国之図」にある「武衛殿」という言葉が、左武衛殿（斯波氏）と右武衛殿（渋川氏）という二つの氏族が合体した略語であるからである。この合体は表 1 から読みとれるであろう。そこではコラム 1 の言語テキスト、『海東諸国紀』の言語テキスト、コラム 2、『攷事撮要』がこれら 2 つの氏族の名前を記している。したがって地図帳の日本図に見られる氏族名は 10 氏族と計算される。朝鮮王はこれらの 10 氏族による朝貢貿易を、4 段階に分かれた接待グレードの内の第 2 位のグレードで認めていた。これは、天皇と将軍を別にすれば、これらの氏族が『攷事撮要』や地図帳の日本図に記されていない 9 氏族よりも、より高い外交上の地位を持って朝鮮王朝の朝貢体制に参加していたことを示している。つまり「日本本国之図」

表 1： 日本図と『攷事撮要』に見える国都、西本州、九州の人名

『海東諸国紀』地図	『攷事撮要』	1652 年以後刊本 地図帳の日本図
天皇殿	国王殿	天皇殿
国王殿	畠山殿	国王殿
畠山殿	大内殿	畠山殿
細川殿	小二殿	武衛殿
武衛殿	左武衛殿	京極殿
山名殿	右武衛殿	山名殿
京極殿	京極殿	細川殿
大内殿	細川殿	大内殿
小二殿	山名殿	小二殿
千葉殿		
節度使		
大友殿		
菊池殿		
田平		
志佐		
呼子		
鴨打		
佐志		

注：『海東諸国紀』地図は「日本本国之図」と「日本国西海道九州之図」である。

と地図帳の日本図の京都の氏族は、『海東諸国紀』の言語テキストや『攷事撮要』にある京都の氏族の、より長いリストを反映しているのである。(天皇は『攷事撮要』には記載されていない。)³⁴⁾

西日本にいた 2 つの氏族、大内氏と小二氏は、『海東諸国紀』の言語テキストと、その地図と、『攷事撮要』の中に見られる。³⁵⁾「日本本国之図」や地図帳の日本図に見られる京都の氏族の配置方法や「武衛殿」という略語の一致は、典拠が『海東諸国紀』の「日本本国之図」であることを示している。西日本の氏族達の中で大内氏と小二氏だけが『海東諸国紀』の地図に登場していることは、最初の地図帳の日本図では、京都の外部のどの氏族を記載するかを決定するにあたり、『攷事撮要』に依拠したことを示していると考えられる。³⁶⁾

政治的、外交的ヒエラルキーは、このように、典拠となった地図からのデータの取捨選択を示している。この地図帳の日本図は 15、16 世紀の朝鮮人官僚が把握していた日本国内の司法、行政、権威のヒエラルキーを描き出しているが、日本国内の権力をめぐる様々なヒエラルキーを完全に提示するものではなかった。「日本国西海道九州之図」における氏族名を落としたために、この地図帳の日本図では朝鮮前期の外交的地位のヒエラルキーは曖昧になっている。しかし江戸で成立した新政府や、新しい将軍（日本図では「関白」）の江戸の居城を日本図の中に示すことによって、朝鮮王朝の 1607 年以降の外交関係を承認している。

日本図におけるレイアウトや補足的な言語テキストの異同を紹介し、地図の方位設定や図像内のデータの典拠について議論することによって、『海東諸国紀』からこの地図帳の日本図へと、様々な情報が取捨され、写し変えられたことが検証された。これらのデータは 15 世紀中頃の朝鮮王朝が当時関心を寄せていた事項を反復している。これらの関心事は 15 世紀中頃に流通していた日本に関する言説を露にしている。この地図に見られるように、そのような言説は統治や国内経済また対外関係などに及んでいた。世紀や大きな出来事の経過、新たなデータの導入は、時代や領土、空間また境界線などの二義的な題目を読み取ることを可能にしている。

行政

『海東諸国紀』の日本の地図は、とりわけ地方の行政を強調している。そこに描かれている統治は、京都の室町幕府から様々な行政機関を通じて地方へと及んでいた。個々の人々に関しても、天皇から中央政府の様々な中央政府から任命された地方官僚、末端の役人を通じて、統治は下へ浸透していた。地方においては、その地方行政が都市と関所に及んでいるのが見られる。地図帳の日本図は中央集権的な国家行政を、日本を国家として叙述するための基本的な叙述法としている。

地図帳の日本図は首都を「国都」と呼び、その言葉を丸い装飾枠の中に置いている。このもっともらしい用語は、「海東諸国総図」と「日本本国之図」の中で装飾枠の中に置かれていた、「日本国都」という用語の略語であろう。先に述べた、天皇と室町幕府のエリートた

ちを取り扱っている言語テキストは、「日本本国之図」と地図帳の日本図では、様々な装飾枠の周囲を取り囲んでいる。室町幕府のエリートの一覧は政治的権威と権力のリストであり、それは足利将軍や退位した将軍たちの近習のリストである。

15 世紀の地図は、線で分離された楕円形の連なりとして、各州を描いている。これらの線とおおかたの地名は、地図帳用の版木に彫り込まれたものではない。地図帳の日本図は、多くの場合に、地方に関する言及を道に沿って数字で関連づけるという、簡略なやり方に行っている。地図帳の日本図は丸い装飾枠の近くに道の数字を書き添えていたが、1 例（山陽道）を除いて、そこには数字は彫り込まれていなかった。これらの数字は『海東諸国紀』の地図には見られないが、文書テキストの巻から収集されたのだろう。

本州の外の州の描写は論評を要する。本州の扱い方と同様に、四国と九州では州名は強調されていない。四国に関しては、地図帳には「土佐州」の名があるのみである。「土佐」の記述の隣には「三州」と彫られている。これら 3 つの州は、ともに四国の 4 つの州を構成している。九州では「筑前州」の東に向かって「八州」と印刷されている。これらの 9 つの地域を一緒にして、九州の 9 つの州を構成している。しかし九州では、薩摩州は不正確に、文字通りには「薩摩島」と提示されている。この州名表記は 3 つの地図帳ともに一貫している。

地図帳の日本図は島である州も提示している。それら是对馬、壱岐、隠岐、そして淡路である。地図帳の日本図は佐渡州を描いてはいない。さらに付け加えると、『海東諸国紀』の地図がそうであったように、志摩州は本州の一部というよりも、これまでの研究で指摘されてきたように、間違っただけの島として提示されている。地図帳の日本図は別の 2 つの島を州として記している。それらは「備後州」と「石見州」である。前者は最初の「備」の字が、「満」に「書き間違い」られている。後者は最初の「石」の字が「不」に「書き間違い」られている。これらの語頭はともに「書き間違い」で、実際の「備後州」も実際の「石見州」も、どちらも島嶼地方ではないからである。これらの 2 つの「島」は、どちらも他の 1652 年以後の地図帳と 1777 年以後の地図帳に現れている。

どのようにして備後州および石見州が島として提示されるに至ったかは不明である。先に述べた「南瞻部州大日本国正統図」の 2 つの版は、答えを探求していく作業を始める一助となってくれるかもしれない。どちらの地図でも、2 つの島は本州西岸から切り離して描かれている。ひとつの島は「長門島」、もう片方は「石見島」と呼ばれている。朝鮮人の官僚たちは、南龍翼が 1645 年の通信使派遣を基に編集した『扶桑録』から、「長門島」を知ることが出来た。しかし南龍翼は「石見島」はリストに挙げていない。³⁷⁾

経済

『海東諸国紀』の複数の地図と地図帳の日本図の間にあるもうひとつの重要な違いは、後者において経済的なデータと温泉の所在が示されていることである。この 1652 年以後の地

図帳の日本図の作者は、これらの情報を州に関する政府による報告書の中から収集したようである。申叔舟は、隣接している道沿いに州を列挙するという日本の慣習に従って州を並べ、また各州の経済的な状況を簡潔に記述した。申叔舟は耕作されている水田の面積に関するデータを記録している。幾つかの州に関しては、申叔舟は様々な金属や硫黄の「産」と温泉についても記述している。この地理的な概要を述べたすぐ後で、申叔舟はまた通商に関する詳細やリストも提示している。

地図帳の日本図では、金属や硫黄、温泉に関しての言及は、隣接する州の地名を横切って置かれている。これらの記述は本州に限られたものではなく、申叔舟はまた九州における硫黄と温泉の記録を提示している。また州の地名は他の様々な文脈においても地図帳の日本図に及んでいる。これらは島嶼（対馬、壱岐、「不」見、「満」後、隠岐、志摩）の認識と、「薩摩島」として提示されている薩摩州に関する正確とはいえない言及、また四国の土佐という名称、紀伊の熊野山の位置、小二氏（筑前）や大内氏（周防）の本拠地などを含んでいる。地図帳の日本図において州は、『海東諸国紀』の地図におけるように、行政上の単位として重要視されているのではなく、鉱業に関する経済行為や、氏族や、選択に値すると見なされた州の所在という点で重要視されていた。

個々の情報のための補足的な言語データに州を還元することは、『海東諸国紀』における典拠としての地図の変化を示している。第一に 15 世紀の朝鮮で作成された地図に描かれた日本は、日本人による行基式の日本図作成法の特徴である、中央政府による統治の強調を模倣していた。しかし後者の地図における金属や硫黄の産出に対する関心は、行政上の細部に関する関心を上回っていた。第二に州レベルでは、行政が変わって経済が最重要事項として置き変わっている。地図製作者にとって鉱山の所在は、州の地名以上に重要な情報であったように思われる。第三に『海東諸国紀』の地図がこの種の経済に関する情報を提示していないことから、地方の概要に関する政府の報告書から地域的なデータをこの地図へと移しかえることによって、金属や硫黄の産出に関する経済的地図が作成された。これが地図帳の日本図の中の地図であった。豊臣秀吉の朝鮮侵略以前に日本が朝鮮と金属や硫黄を交易していたことが、地図帳の日本図におけるそれらの重要性を説明する一助となるかもしれない。

日本、そして日本人との関係

朝鮮における日本との貿易で金属や硫黄が重要性を持っていたことから、経済的なデータもまた朝鮮王朝と大内氏のような要人たちとの関係という文脈で考察されるだろう。『海東諸国紀』の構成に影響を与えた対外関係という文脈は、また朝鮮王朝の外交政策のより広範な特徴を示している。より具体的に言えば、この地図帳の日本図は公式の外交政策と交易という、ふたつのレベルを描き出している。この地図は朝鮮国王の「日本国王」との交隣関係や、その他の日本人との朝貢関係を示している。朝貢関係は先に述べた氏族の名前から明らかである。

この地図帳はこのような 2 国間の関係や、朝鮮国王の使節達が京都の足利将軍のもとに赴いた際に辿った行程での投宿地等の詳細を示している。対馬の後で、描かれているのは「赤間関」（「関」と誤記）、竈戸関、尾道関、兵庫浦、そして京都（「国都」と表記）であった。『海東諸国紀』の文書に挙げられている全ルート（『海東諸国総図』に再録されている）は釜山－対馬の豊崎－対馬の船越－壱岐の勝本－博多－長門州の赤間関－竈戸関－尾道関－兵庫浦－京都（王城または都と記載。³⁸⁾この使節が辿ったルートについては後で触れる。）。

朝鮮王朝から見た 2 国間関係は、明朝中国中心の朝貢体制の体系の中で実施されていた。このような 2 国間の対外政策は、この地図帳の地理的、文化的そして外交的な明朝中国中心主義を反復している。朝鮮中心の朝貢体制は、日本人の朝貢による接触に対して朝鮮王朝を中心にしている。このことは、この地図帳の（交流上の）世界全体と諸地域内の様々な関係性の秩序に新たなものを付け加えている。

日本図にみられる時間

この地図帳の日本図は「歴代図」でもあり、政治における時間の経過や、あるいは行政における時間の堆積を示している。日本図は室町時代と徳川時代の日本を描いており、この点でこの日本図は地図帳の中国図と類似している。これらふたつの地図はともに現在、過去、そして国家や国土や歴史の絡み合った言説の中の連続性に秩序を与えている。時間とは国家の時間であった。この地図帳の国図は、それが空間を切り取り、形成していると同様に、その国家の時間を切り取っている。しかし日本図は室町幕府の滅亡と、徳川幕府の成立の間の、国家レベルでの政治的な時間を欠いている。

上述したように、この地図の製作者は、『海東諸国紀』の行政的な日本図を、徳川幕府を示すために改定している。彼はその内側に「江戸」と記された円形の装飾枠を付け加え、そのそばに「関白居所」という文章を置いている。このような試みは、経済や政府の二次的な行政レベル、あるいは朝鮮王朝の朝貢体制の言説のために、徳川時代を提示することには用いられなかった。言語テキストが中央政府の過去と現在を言語的かつ地理的に提示しているのに加えて、江戸における新政府の設立に至る連続性もまた、これらの 2 つの日本図の中の行政図に認められるだろう。道や州はこの新政府の下でなお存続している。

領土の境界線は、この地図帳の日本図における時間の描写をより複雑化している。南部に関して言えば、国家の時間の堆積の中に、1609 年に薩摩藩が奄美諸島を琉球から吸収したことは記録されていない。北部はより微妙な問題を含む状況にあり、つまり地図製作者は「雁道」と呼ばれる想像上の土地を書き残している。連続性を内包している現在としての時間や土地の境界線は、これらの（そしてそれ以外の）地図における 17 世紀と 18 世紀の日本という領土や日本の行政の表出に共通してはいない。

変わることのない南部の境界線地域の分析には、地図帳の琉球図を同時に考慮する必要がある。1652 年以後に刊本された地図帳の琉球図である図 4 を参照されたい。薩摩藩の 1609

年の琉球攻撃の結果として、ある解釈では、薩摩藩の大名は鬼界島、徳島、輿論島、沖永良部島、そして奄美大島を「琉球国王の管轄から」獲得し、「これらの島々の領域を己の領土に編入した」としている。³⁹⁾ この見解は、この島々が琉球の領土の一部として残っていることを仄めかしている。別の解釈では、これらの島々を、領土的にも司法的にも、薩摩藩経由で徳川幕府の支配下に置かれているとしている。さらに3番目の解釈は、琉球政治における薩摩の影響の実態を中国の清朝政府に対して隠匿するための、境界線や領域や司法権の戦術的分散を強調する。難破船乗組員の送還や朝貢関係のために清朝中国と折衝する際に、琉球王朝と薩摩藩は、これらの島々を琉球の領域であり、国王の司法権の下にあるかのように扱った。⁴⁰⁾ しかし地図帳の日本図および琉球図の製作者（たち）は、これらの島々を琉球図から日本図に移動させなかった。

それには次のような説明ができるだろう。姜沆は1600年に朝鮮に帰ったのだが、彼の地図の日付は不明である。姜沆は日本で日本地図を見て、薩摩藩が琉球を侵略した1609年以前の図像を製作したと推測できる。もしも実際に姜沆が薩摩藩の攻撃に先立って地図を完成していたとすれば、彼の地図ではこれらの島々を日本の中に見出すことはできなかったことだろう。1652年以後の地図帳は、『海東諸国紀』の九州図と、いかにもありそうなことだが、姜沆の地図の領土的内容を繰り返していた。18世紀末の複数の地図帳がこれらの島々を日本図の中に含めていないのは、おそらく刊本の単純化という経済的な思惑があったからだろう。

その一方で、清朝中国で作成された琉球図は、これらの島々を琉球に含ませ続けている。琉球の地理的隠喩である「三十六島」を取り上げると、清朝皇帝の琉球国王に対する使節である徐葆光は「琉球三十六島図」の地図を描き、これらの4島を首里の「北東部の8諸島」⁴¹⁾の中に入れて列挙している。琉球の史家たちは、琉球王朝の司法権の限界に気づいており、彼らの漢文による琉球の歴史書、『中山世譜』の中で、「三十六島」の言説を分散させている。『中山世譜』は琉球の行政部門や政庁の列挙に沿って、そして国家の歴史に先立って、「三十六島」を紹介している。島名は、薩摩藩に編入された島々も含めて、まず最初に中国語表記が、次に琉球語の表記が提示されている。地図はこの王国の領土目録を補完し、言説の空間的な面を視覚化して、琉球の上にパノラマ的な眺望を拓いている。地図内の地名は中国語表記で書かれているが、それは漢文表記が琉球語による表記に優先されていることの反映である。⁴²⁾ しかし『中山世譜』は薩摩藩の侵略の詳述の中で、島々を失ったことに言及していない。⁴³⁾

朝鮮での地図帳の中で日本の領土的、司法権的境界線は1609年以後の日本の状況を反映していない。個々の地図については、地図帳全体が、琉球王朝との関係性を通して、そして地図製作を通して、清朝政府から見たように領土が枠組みされている。地図帳はまた、17世紀中頃の文脈の中で「三十六島」を位置づけている。

朝鮮の地図帳の日本図や、琉球の地図や、江戸時代の日本で市場のために製作された多くの日本図や、清朝時代の中国の地図を観察すると、鬼界島、徳之島、輿論島、沖永良部島そ

して奄美大島はまとめてひとつの地域であり、琉球の一部となっている。「琉球国」を含んでいる徳川幕府の「国絵図」の地図（寛永・正保版、元禄版、天保版）を通観すると、これらの島々はひとつの地域とみなされて、日本の一部を形成している。⁴⁴⁾ または、渡辺美希が論じているように、これらの島々は琉球と日本の間の境界ゾーンにある。⁴⁵⁾ それ故に行政的な観点から見ると、これらの島々は行政権が重複しているとみなされ、議論される争点次第で、日本の一部であったり、琉球の一部であったりする。したがってこれらの島々は時間的にも多様性があり、琉球人と日本人の暦によって統治され、歴史化して解釈することが可能である。15 世紀中頃の朝鮮で作成された地図に見られる海域地理を反復している、朝鮮で作成された地図帳において、琉球の領土とされているこれらの島々は、文化的統治秩序に繋げ得る琉球人の空間的アイデンティティーの政治にとって、きわめて重要なものであった。鬼界島、徳之島、興論島、沖永良部島、そして奄美大島は、それらが中央と地方の司法権のアイコンであるという、領土的かつ外交的な言説の形象であった。

時間によって地図帳の日本図は多様な枠組みに分割され、それらは地図に描かれた空間を、地図そのものによって、互いに重複する複数の「日本」に分割した。言葉を変えれば、言説・時間・分割され組み合わされた空間が、地図帳の日本図の中で複数の地図を構成している。領土、時間、そして空間もまた、朝鮮図、日本図、そして琉球図の組み合わせという一要素によって描き出された海域を媒介させていた。

雁道

日本図はまた、本州の北東岸沿いにある、雁道（または「雁道島」—— 地名は地図内の表記による）と呼ばれる想像上の地域を提示している。雁道は 15 世紀初頭から日本と朝鮮で作成された多くの日本図に登場しており、最も古くまで遡った例は 1305 年もしくは 1306 年に日本の仁和寺に保管されている図像である。この地名と島のアイコンは、竜谷大学に保管されている「混一疆理歴代国都之図」の中に、（そして、おそらくその原典である 1402 年の世界地図の中にも）、そして『海東諸国紀』の「海東諸国総図」と「日本本国之図」へも書き込まれている。この「場所」は 17 世紀中頃の朝鮮人の地図製作法では新奇なものではなかった。

雁道は『今昔物語』の中の言及によって、または唐朝中国北部の重要な防衛拠点であった「雁門」という地名によって、日本の地図作成法の中に散見されるようになったと推測される。黒田日出男は、唐朝中国で「雁門」が配置されたように、日本人は外部世界に近接する北部地域の地図に「雁道」を描き込んだのではないかとしている。⁴⁶⁾ 青山宏夫は、「雁道」は国家による儀礼が魔物達を追いやる四つの方角の中の北部の場所であったと論じている。「異域・異界」のイメージのように、「雁道」は領土の中核である首都と対照を成している。⁴⁷⁾ 日本の文学や政治学、そして地図作成において、「雁道」は地理上の現実の場所とはみなされていなかったようである。

しかし 17 世紀中頃の朝鮮の文書の中で、南龍翼によって書かれた日本国内の地理に關す

る文書を字義通りに解釈すると、彼は（おそらく自ら『海東諸国紀』を参照したと思われるが）地図上の「雁道」を現実の島であると解釈したのではないかと思われる。佐渡地方に関する描写の中で南龍翼は、佐渡の「北有雁道」と述べている。⁴⁸⁾ 姜沆もまた、「倭国地図」にこの場所をとりあげているが、彼はその地名を最初の一字を取って「雁」としていた。

地図帳の日本図におけるこの想像上の場所の存在は、様々な要素の結びつきに由来しているのだろう。まず第一に、先述したように、「雁道」は『海東諸国紀』の中の「海東諸国総図」と「日本本国之図」に現れている。『海東諸国紀』のこれらのふたつの地図の中には、他の幾つかの想像上の島々も描かれていた。これらの島々は本州の南部に位置している。しかし申叔舟は、『海東諸国紀』の文章の中では、これらの想像上の島々について何ひとつ述べてはいない。

姜沆は、「倭国地図」の中にはこれらの南方の想像上の土地をひとつも載せてはいないが、「雁道」は描いている。同様に、地図帳の日本図は本州の南のこれらの想像上の場所をひとつとして含めてはいないが、「雁道」はそこに描かれている。『海東諸国紀』の2枚の地図、姜沆の地図、そして地図帳の日本図は「雁道」を載せている。しかし本州の南の想像上の島々を描いているのは『海東諸国紀』だけである。その上、南方に置かれたこれらの想像上の場所を掲載しないことで、姜沆の地図と地図帳の日本図は、「雁道」をその地図上の相棒である「羅刹国」と切り離している。この「羅刹国」という想像上の場所は、14世紀初頭から日本で作成されて日本図にも、そして15世紀初頭から朝鮮で作成された日本図にも現れている。地図製作者は姜沆の「倭国地図」を『海東諸国紀』の地図と同様に、参照したように思われる。『海東諸国紀』の地図と比較される姜沆の地図に「雁道」だけが描かれていることは、この地図帳の日本図に「雁道」のみが記載されていることの説明になるだろう。姜沆の「倭国地図」と地図帳の日本図は、朝鮮の地図作成法によって「雁道」を領土化しているのである。もしそうであれば、地質学的な時間を持たないこの土地は、朝鮮の地図作成における慣習の中でひとつの土地とみなされるようになったのである。そのためにまた「雁道」は歴史的な時間をも付与されたのだろう。さらに領土的な観点から見た日本や、司法権の見地から見た日本の地図化された空間は、この想像上の島を含むまでに変化し拡大したのである。けれども朝鮮時代の地図の読者たちが、朝鮮や日本の日本図において、「雁道」や他の想像上の島々をどのように理解していたのかということには、更なる研究が必要であろう。

テキストと地図、テキストのない地図

『海東諸国紀』の地図は政府の報告書の文書テキストと切り離されてあるものではない。むしろそれらの地図は、申叔舟の日本と琉球に関する文章を補完し、増補するものである。それらはこの政府の報告書において取り上げられた土地や個人を、空間の中に位置づけている。したがってこれらの地図を読むことは、申叔舟が王朝の記録から収集した文書テキストを読むことを要求するのである。

しかし刊本された地図帳は、地図の枠外に添えられる諸外国に関する言語テキストを持たない地図のコレクションとして作成された。この地図帳は、日本図と琉球図を、『海東諸国紀』におけるその配置や役割から切り離している。外国に関する補足文書を全く欠いている日本図（そして琉球図）は、使用者に限られた情報だけを提供する。様々な地図帳の手写された地図帳の中の日本図に添付されている言語テキストから判断すると、『攷事撮要』や李暉光の『芝峰類説』は『海東諸国紀』をそれらの典拠としていたと考えられる。

朝鮮半島から京都への外交使節団のルートは、地図帳の日本図の限定された読解の可能性を示す一例である。15世紀の豊崎―船越―勝本浦―博多―赤間関―竈戸関―尾道関―兵庫浦の繋がりは、おそらく17世紀中頃の、あるいは18世紀後半の地図帳の日本図において、他のテキスト、とりわけ『海東諸国紀』を参照することなしには不可能だったことだろう。『海東諸国紀』に触れることのない読者にとって、『海東諸国紀』から図像データのみを分離することは、前記の諸地域を空間の中に再び位置づけると同時に、また『海東諸国紀』の外交政策に関する言説の中のこの要素からそれらの地域を切り離すものであった。

おわりに

これらの刊本された地図帳は、朝鮮後期の朝鮮人の読者たちが、言語テキストによって学ぶことができるように、諸外国を提示していた。そしてそれらのテキストは、李暉光や朝鮮王朝の官僚たちのような、日本に渡航した人々によって記されたものであった。このような印刷された地図帳は、個別の地域の地図や、あるいは複数の国々を1枚に表した地図の4種の組み合わせにより、構成されている。それは具体的には、世界全体を示す「天下図」、中国図、朝鮮国図、また道図、そして日本図と琉球図であった。1652年以後の刊本された地図帳は、現在存在している朝鮮時代の地図のコレクション以前には見られなかったやり方で、地図の中に空間を結合したのである。

宗教的、文化的、政治的、そして外交的言説がもたらした地理概念は、地図帳の世界図の中で明朝中国を中心としていた。この世界は異質なものを融合した世界図「天下図」から、中国、朝鮮、日本、琉球の各国の個別の地図を通じて展開されている。明朝中国を中心とするこのような世界はまた、明朝中国から朝鮮を通じて「天下図」の中に埋め込まれた儒教文化の地図からも、次々と出現した。文明に関する言説は、中国の地図製作法においてしばしば見られるように、地図製作における枠組みを前提とする。⁴⁹⁾ その製作の基礎をなす地図帳や地図製作上の習慣は、文明に関する朝鮮人の言説、明朝中国の文明を記号化した言説を、視覚化し可視化している。

地図製作者は、日本と琉球を含む朝鮮海上地域の中心を朝鮮に置いている。それらの地図は『海東諸国紀』の地図で描写された15世紀中頃の海上地域の秩序を再生産している。それらの地図はまた、視点と視座を朝鮮に置くことによって、地図に新たな視界を与えた。この視座は、朝鮮、日本、琉球、つまり海上地域の「三国世界」を見渡すものである。この地

図化された「三国世界」の根拠は『海東諸国紀』にある。1652 年以後の地図帳と 1777 年以後の地図帳（そして他の朝鮮後期の諸地図）は、この「三国世界」を模倣的に再現している。つまり、この視座は数世紀に渡って続いていたのである。これらの地図帳の「三国世界」は、地図帳の日本図や琉球図が示していたように、日本（と琉球）についての王朝の公的な情報が民間に浸透し流通したことも示している。そのような情報は、時代遅れになったテキストからのものではあったが、17 世紀中頃以降朝鮮で、15 世紀と 16 世紀における『海東諸国紀』よりも、もっと広範囲に普及したのであった。

（翻訳：宮沢恵理子）

（付記）

本稿は日本学術振興会科学研究費の助成を受けた「8-17 世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流—海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—」（研究代表者：村井章介）と、筆者の日本学術振興会科学研究費補「『海東諸国紀』研究—「本の歴史」から見る東アジア対外関係史」による研究成果の一部である。

註

- 1) Shannon McCune, “Old Korean Hand Atlases,” *The Map Collector*, no. 4 (September 1978), 36.
- 2) Nakamura Hiroshi, “Old Chinese World Maps Preserved by the Koreans,” *Imago Mundi*, no. 4 (1947), 3-22; 海野一隆「朝鮮李朝時代に流行した地図帳——天理図書館所蔵本を中心として」『ビブリア』第 70 号（1978 年 10 月）2-28 頁；McCune, “Old Korean Hand Atlases,” 31-36; Shannon McCune, “The Chonha Do: A Korean World Map,” *The Journal of Modern Korean Studies*, vol. 4 (May 1990), 1-8.
- 3) Bernhard Klein, *Maps and the Writing of Space in Early Modern England and Ireland*, (New York: Palgrave, 2001), 10.
- 4) James R. Akerman, “From Books with Maps to Books as Maps: The Editor in the Creation of the Atlas Idea,” in Joan Winearls, ed., *Editing Early and Historical Atlases: Papers Given at the Twenty-ninth Annual Conference on Editorial Problems University of Toronto, 5-6 November 1993*, (Toronto: University of Toronto Press, 1995), 3-4.
- 5) James R. Akerman, “The Structuring of Political Territory in Early Printed Atlases,” *Imago Mundi*, no. 47 (1995), 139.
- 6) 1652 年以後の地図帳 no.1: 神戸 167 「天下図 附朝鮮（仮）」、神戸 168 「朝鮮地図帳（仮）」、1652 年以後の地図帳 no.2: 神戸 163 「朝鮮地図帖（仮）」、神戸 165 「朝鮮地図帳（仮）」；1777 年以後の地図帳: 神戸 166 「輿地図（仮）」。これらの地図のすべては神戸市立博物館の南波松太郎コレクション所蔵。1767 年以後の刊本地図帳は、「70. 天下総図」内の「70-12. 日本国図」『嶺南大博物館所蔵韓国の古地図、資料篇』嶺南大学校博物館、1998 年 10 月、75 頁（韓国語）。
- 7) Akerman, “The Structuring of Political Territory in Early Printed Atlases,” 151.
- 8) Akerman, “The Structuring of Political Territory in Early Printed Atlases,” 151.
- 9) Richard J. Smith, “Mapping China’s World: Cultural Cartography in Late Imperial Times,” in Wen-hsin Yeh, ed., *Landscape, Culture, and Power in Chinese Society*, (Berkeley: Center for Chinese Studies, Institute of Asian Studies, University of California, Berkeley, 1998), 94-95 頁を参照されたい。同様

の世界図の中国人的読解について論じられている。

- 10) Nakamura, “Old Chinese World Maps Preserved by the Koreans,” 8.
- 11) 地図製作上の様々な文化的関係については Denis Cosgrove, “Introduction: Mapping Meaning,” in Denis Cosgrove, ed., *Mapping*, (London: Reaktion Books, 1999) を参照されたい。
- 12) Karen Wigen, *The Making of a Japanese Periphery 1750–1920*, (Berkeley: University of California Press, 1995), 110–111.
- 13) 海野一隆、「朝鮮李朝時代に流行した地図帳 —— 天理図書館所蔵本を中心として」15–19頁；李燦『韓国の古地図』汎友社、1991年12月、366–367頁（韓国語）。
- 14) 海野一隆、「朝鮮李朝時代に流行した地図帳 —— 天理図書館所蔵本を中心として」18–19頁。中村と李燦はどちらも『輿地図帳』は16世紀初頭以後に現れたと示唆している。（Nakamura, “Old Chinese World Maps Preserved by the Koreans,” 10；李燦『韓国の古地図』、214頁（韓国語）。
- 15) Quoted in Gari Ledyard, “Cartography in Korea,” in J.B. Harley and David Woodward, eds., *The History of Cartography, volume two, book two: Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1994), 245.
- 16) 『睿宗実録』巻6 睿宗元年6月癸酉（21日）条；『成宗実録』巻138 成宗13年2月壬子（13日）条；『中宗実録』巻89 中宗33年11月乙未（25日）条。明朝中国の地名辞典である『大明一統志』は1461年4月に完成した。その中には中国全図と明朝の地方州地図が含まれており、遅くとも1477年には朝鮮に伝えられていたようである。（『成宗実録』巻83 成宗8年8月辛酉（27日）条。）
- 17) JaHyun Kim Haboush, “Constructing the Center: The Ritual Controversy and the Search for a New Identity in Seventeenth-Century Korea,” in JaHyun Kim Haboush and Martina Deuchler, eds., *Culture and the State in Late Chosŏn Korea*, (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 1999), 69.
- 18) Haboush, “Constructing the Center,” 70頁を参照されたい。
- 19) 『端宗実録』巻7 端宗元年7月己未（4日）条。
- 20) 序文の全文は申叔舟『海東諸国紀』朝鮮総督府、1933年11月の所収。
- 21) 「日本本国之図」「日本西海道九州之図」は『海東諸国紀』所収。
- 22) 日本を地図化する上での第4番目の形式では、漢字4文字ずつの2行に分かれた説明文は、右上方角に置かれている。（『地図』『日本図』東洋文庫所蔵）。
- 23) W.J. T. Mitchell, *Iconology: Image, Text, Ideology*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1986), 42頁を参照されたい。
- 24) J. B. Harley, “Text and Contexts in the Interpretation of Early Maps,” in J.B. Harley, *The New Nature of Maps: Essays in the History of Cartography*, (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001), 38.
- 25) 姜沆『看羊録』、『海行摠載』第1巻所収、朝鮮古書刊行会、1914年2月、368頁。
- 26) 姜沆『看羊録』368–369頁；「(2) 古代日本地図（伝稗行基地図）」、『唐招提寺』角川書店、1955年8月、54頁。「南瞻部州大日本国正統図」東京大学総合図書館所蔵。
- 27) 姜沆「倭国地図」『睡隠集』、ハーバード・燕京図書館所蔵、ハーバード大学。ハーバード大学の記録では、この印刷された巻の年代について「1658年？」と示唆されている。
- 28) 「(2) 古代日本地図（伝稗行基地図）」。
- 29) 「南瞻部州大日本国正統図」、東京大学図書館。
- 30) 姜沆「倭国地図」『睡隠集』。

- 31) 李晔光『芝峰類説』（朝鮮古書刊行会、1915年8月）、45頁。
- 32) 言語テキストもまた『海東諸国紀』の文書テキストに典拠があることをについて、最も明言しているのは海野一隆である。（海野、「朝鮮李朝時代に流行した地図帳」9～10頁。）
- 33) 楊普景「韓国の古地図」『嶺南大博物館所蔵韓国の古地図（資料編）』汎友社、1998年5月、126頁（韓国語）。
- 34) 『海東諸国紀』「国王殿」「畠山殿」「細川殿」「左武衛殿」「山名殿」「京極殿」「右武衛殿」；魚叔權『攷事撮要』京城帝国大学法文学部、1941年2月、1a-2a。
- 35) 『海東諸国紀』「大内殿」、「小二殿」。
- 36) 次の推定はこの点によって明らかとなろう。1652年以後の地図帳のどちらにも、日本図が最初の印刷より以前に公的に、あるいは私的に広まっていたとする証拠はなく、地図帳の日本図はまず一つの地図帳で広まったと推定できる。しかし、琉球の地図が『海東諸国紀』の琉球図に形状という点できわめて近いのに比べて、日本図には独特の形状を付与していることから見ても、そのような地図が1652年以前に朝鮮において広まっていたということは、ありそうもない。
- 37) 南龍翼『扶桑録』『海行摠載』第三卷所収、朝鮮古書刊行会、1914年4月、452-453頁。
- 38) 『海東諸国紀』「道路里数」。
- 39) Gregory Smits, *Visions of Ryukyu: Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics*, (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999), 18.
- 40) この見解は渡辺美希氏の研究から示唆を受けたものである。
- 41) 「琉球三十六島図」、徐葆光『中山伝信録』、『那覇市史史料編』第一巻、那覇市役所、1977年3月、125-126頁。
- 42) 『中山世譜』、『琉球史料叢書』第四巻、井上書房、1988年7月復刻再版、10-11頁。
- 43) 『中山世譜』、110頁。
- 44) 琉球の扱いにおける日本の公式な地図と商品としての地図の間の矛盾というこの問題については、ロナルド・トビ「近世期の「日本図」と「日本」の境界線」、黒田日出男、メアリ・エリザベス・ベリ、杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、2001年8月、79-102頁。
- 45) この問題に関する渡辺美希の論文を参照されたい。
- 46) 応地利明『絵地図の世界像』岩波書店、1996年12月、39-48頁；黒田日出男「行基式「日本図」とはなにか」黒田日出男、メアリ・エリザベス・ベリ、杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、2001年8月、45-49頁；黒田日出男「日本国と他者——行基式〈日本図〉と「三韓」——」黒田弘子、長野ひろ子編『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』吉川弘文館、2002年6月、6-10頁。
- 47) 青山宏夫「雁道考——その日本図における意義を中心にして」『人文地理』第445号、1992年、566-585頁。
- 48) 南龍翼『扶桑録』451頁。南龍翼はまた大身、渤海（志摩州）；三仏齋、女国（安房州）；近瀛（上総州）；羅利（下総州）；扶桑（陸奥州）；大漠、黒齒諸国（紀伊）という架空の場所を地図上に置いている。また彼の長門島への言及は、彼がこの場所を描写している「南瞻部州大日本国正統図」や他の地図を見ていたことを意味していると考えられよう。
- 49) Smith の “Mapping China's World,” 94 頁を参照されたい。



日本図 1
1652 年以後、神戸 168



日本図 2
1652 年以後、神戸 165



日本図 3
1652 年以後、神戸 163



琉球図 4
1652 年以後、神戸 168